# 同期型オンライン授業を学生はどのように受け止めているのか
## ～比較日本文化論の学生アンケート調査から～

山　田　智　久

### 1．はじめに

2020年初頭、全世界で新型コロナウイルス感染症（以下、便宜上コロナウイルスと表記する）が爆発的に拡大した。社会活動が制限され教育機関でも授業ができない期間が続き、筆者が担当する「比較日本文化論」も 15 回すべてがオンラインでの実施となった。加えて、今年度は様々な事情から留学生の履修者が皆無という履修者内訳となった。このような通常とは異なる状況下で行われたオンライン授業を学生はどのように受け止めていたのか、また担当教員にどのような気づきがあったのかについて記録して残すことが本稿の目的である。

### 2．先行研究

コロナウイルスが流行しだして、まず教員は授業のオンライン化への対応に迫られた。所属する機関からの情報、SNS 上での情報などから自分の授業をどのようにオンライン化するかについて多くの教員が苦心したことは記憶に新しい。オンライン授業の細かな分類や特性については本稿での射程としないがオンライン授業は大きく同期型と非同期型に分けられている（赤堀 , 2020：28、佐藤，2020：10）。前者が Microsoft Teams や zoom、Google Meet などの Web 会議システムを用いてリアルタイムで授業を行うのに対して、後者は、manaba などの LMS（Learning Management System）や Google Classroom などに授業動画や課題をアップロードするオンデマンド型の授業形態である。なお本稿で扱う授業は、zoom を使った同期型授業[i]で行われた。

教師がオンライン授業を実施してみての気づきと課題としては、千葉大学教育学部付属小学校（2020：146-149）が、次の 4 点を挙げている。

① 子どもたちの別の一面が見えてきたこと
② 子ども個人のペースが確保されること
③ 在宅勤務が可能となること
④ 家庭の支えの重要性

この中で①と②は授業がオンラインで提供されることによって、今まで見えていなかったものが見えてきた具体的な例であろう。この点については、苫野（2020）も次のように指摘している。

> 「みんなで同じことを、同じペースで」学んでいれば、構造的に、必ず授業についていけない子ども、またその逆に、すでにわかっていることをくり返し勉強させられる

ことで勉強が嫌になってしまう、いわゆる「落ちこぼれ・吹きこぼれ」の問題が生じます。（p.6）

オンライン授業は、今まで教室で起きていた問題を顕在化させる転機ともなりうることを苫野（上掲）は示唆している。

高等教育機関でのオンライン授業からの気づきとしては、中原（2020）の振り返りが示唆に富む。中原はコロナウイルスにより授業をオンラインで提供せざるをえなくなったことで、次の気づきがあったと述懐している。

「オンライン授業をつくる」とは「既存の授業をオンラインに置き換える」のではなく、「オンラインで学生が学びやすい授業を、もう一度つくり直すことなのだ」（p.49）

中原（上掲）の指摘は間違いなく今回のコロナ禍と教育の関係についての本質を捉えている。既存の授業をそのままオンラインに置き換えることは物理的に不可能であるし、教師、学生の負担も相当なものとなる。そうであれば、何がオンライン授業で伝達しやすいのか、何が教室での対面授業[ii]で価値を生むのかを教師がしっかりと理解する必要がある。

## 3.　授業概要

本稿で調査対象とする授業は2020年度前期開講の「比較日本文化論」という授業である。当該授業は留学生と日本人学生の協働学習の過程から相手の文化だけでなく自国の文化についても相対的に理解を深めることを目標としている。この教育目標を達成するためにグループワークを主体とした課題解決型授業[iii]を行ってきていた。しかしながら今年度はコロナウイルスの影響のため多くの留学生が来日できず、加えて教室での対面授業の実施が困難なことから全15回の授業がオンラインにて実施された。

履修者は上記の特殊な状況により、日本人学生19名のみとなった。したがって授業の到達目標は変えずに授業計画を変更した。昨年度までは、留学生と日本人学生からなる混成グループで課題を検討しつつ、解決案をプレゼンテーションしてもらう形式としていたが、今期は、教員から出された課題についてオンラインでリアルタイムにディスカッションを行う形式で行った。ディスカッションは、学生間はもちろん、教師と学生間でも行われた。グループは、学生3～4名でランダムに構成した。なお、ディスカッションの課題として扱ったものは次のものである。

A）　新卒で入社した会社が嫌でも1年は我慢して働くべきである。
B）　途上国で経済的に苦しい学生に対して教科書のコピーを配布するのは良くない行為である。
C）　日本の学校教育において英語教育は10歳より前から行うべきである。

これらの課題に対して、「そう思う」、「そう思わない」の立場を決めた上で、その理由について授業三回を使ってディスカッションを行った。ディスカッションの課題はあえて意見が割れるように考えられている。加えて、課題に関連するデータを毎回調べていくこと

で自分が取る立場についても客観的に再考できるようになることも教育目標として組み込まれている。

## 4. 調査概要

調査対象者は、比較日本文化論を履修した学生19名とし、2020年8月1日から8月10日までGoogle Formsを使った無記名アンケート調査を行った。その結果、14名からの回答を得られた。アンケートの質問項目は、事前に3名の学生へのパイロット調査を行い項目の選定を行った。主にオンライン授業全般とオンラインでのディスカッションについての質問を設定した。回答形式はリッカート尺度を用い「強くそう思う」、「そう思う」、「わからない」、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」の5段階尺度とした。実際に使用した質問項目は次の通りである。

① オンラインでのディスカッションで自分の発話量は増えた。
② オンラインでのディスカッションで発話時の心理的なプレッシャーは軽減された。
③ オンラインでのディスカッションで他の学生の発言のタイミングに気を遣うことが多かった。
④ オンラインでのディスカッションで教員と話しやすかった。
⑤ オンラインでのディスカッションで挙手して発言しやすかった。
⑥ オンライン授業は物理的な移動がないのでグループディスカッションへの移行が楽だった。
⑦ オンライン授業はスライドが見やすかった。
⑧ オンライン授業はノートテイキングが楽だった。
⑨ オンライン授業は対面授業と比べて友人ができやすかった。
⑩ オンライン授業は「隣の学生とちょっと話す」ということがしにくかった。
⑪ オンライン授業は対面授業に比べて疲れた。
⑫ オンライン授業の良い点を3つ書いてください。（自由記述式）
⑬ オンライン授業の悪い点を3つ書いてください。（自由記述式）
⑭ オンライン授業で伸びる能力とはどんなものだと思いますか。（自由記述式）

## 5. 結果と考察

本節ではアンケートの集計結果をもとにオンライン授業で学生がどのようなことに困難を感じていたのか、また価値を見出していた点は何かについて論じる。まずはリッカート尺度の質問への回答結果を記述統計にて表1に示す。

表１　アンケート回答の集計結果（平均値）

| 質問項目 | |
|---|---|
| ① オンラインでのディスカッションで自分の発話量は増えた。 | 3.71 |
| ② オンラインでのディスカッションで発話時の心理的なプレッシャーが軽減された。 | 3.57 |
| ③ オンラインでのディスカッションで他の学生の発言のタイミングに気を遣うことが多かった。 | 4.57 |
| ④ オンラインでのディスカッションで教員と話しやすかった。 | 4.07 |
| ⑤ オンラインでのディスカッションで挙手して発言しやすかった。 | 3.28 |
| ⑥ オンライン授業は物理的な移動がないのでグループディスカッションへの移行が楽だった。 | 4.79 |
| ⑦ オンライン授業はスライドが見やすかった。 | 4.71 |
| ⑧ オンライン授業はノートテイキングが楽だった。 | 4.42 |
| ⑨ オンライン授業は対面授業と比べて友人ができやすかった。 | 1.71 |
| ⑩ オンライン授業は「隣の学生とちょっと話す」ということがしにくかった。 | 4.36 |
| ⑪ オンライン授業は対面授業に比べて疲れた。 | 3.28 |

（n=14）

表１で示された結果の中で特に際立っている値は、⑨の友人ができやすいかという項目である。この項目は他の項目に比べて極めて低い値となっている。反面、⑥の物理的な移動や⑦のスライドの見やすさ、⑧のノートテイキングなどの結果は非常に高い値となっている。

ディスカッションに関する問いでは、③の発言のタイミングに気を遣うという項目で高い値が示されたことを裏付けるかのように、⑩の隣の学生と話すことが難しいという項目も高い値となっている。

以上の結果から、学生はオンライン授業で、物理的な移動の制約がないことや資料の見やすさなどには好意的な受け止め方をしている一方で、「自由に話す」ということに関しては、何かしらの制限を感じていることが窺える。これらの結果について以下に詳述する。

### 5.1　物理的な移動

リッカート尺度のアンケートへの回答結果でもっとも高い数値を示したのが、⑥のグループディスカッションへの移行である。通常の授業では、机や椅子を動かしたり、自分の荷物を持って移動したりする必要がある。この時間は数分であるが、授業とは直接関係のない時間である。これに対してオンラインでのディスカッションでは教員が zoom のブレイクアウトルーム機能を使ってグループを設定するだけで良いので物理的な移動が発生しない。学生はこの点を好ましく捉えているようである。事実、14 名の回答者全員が物理的な移動についての利点は認めており、自由記述の質問項目「オンライン授業の良い点を３つ書いてください」に対して、14 名全員が「教室内の移動、通学の時間が必要ないこと」を挙げていた。

学生はオンラインでのディスカッションの利点を物理的な移動がないことを挙げているが、授業を運営する教師の側からすると欠点もある。最大の欠点は、あるグループの話を

聞きながら同時に隣のグループの話を聞くといった行為ができないことではないだろうか。すなわち全てのグループの進捗把握を並行してできないために教室という空間を授業全体として捉えにくいのである。このことは実際の教室授業とオンライン授業での大きな差となりうると感じた。

### 5.2　資料の整理

質問項目の⑦と⑧の回答結果も高い数値を示している。⑦はスライドの見やすさで、⑧はノートテイキングである。スライドの見やすさについては、教員が作成したスライドの質なのか、それとも自分のデバイス画面での見やすさなのか判断が分かれることも考えられるが、4.71 という高い値を示している。同様に、ノートテイキングでも 4.42 という値を示している。「オンライン授業の良い点を３つ書いてください」という自由記述の質問項目からも５名の学生が「スクリーンショットを取ることができるので記録が楽になった。」と書いている。加えて「オンライン授業では教師が PDF ファイルで資料を送ってくれるのでパソコンやタブレット型端末に授業の資料を入れておけることが便利である」という記述も４名に見られた。つまり授業資料の見やすさやその管理については、学生はオンライン授業に一定の利があると考えている可能性が高いことが窺えた。

### 5.3　オンラインでの会話

オンラインでの会話については比較的困難が伴う結果が見えてきた。たとえば、質問項目③の「オンラインでのディスカッションで他の学生の発言のタイミングに気を遣うことが多かった」への回答では、4.57 という高い値を示している。当該授業は zoom を使って行ったが、その機能性質上、複数の人が同時に自由に話すという行為は難しい。すなわち、コミュニケーションの方向が発話者と聞き手という一方向性の関係になりがちということである。自由記述の「オンライン授業の悪い点を３つ書いてください」という質問項目にも 11 名の学生が「発言の際に他の人と被らないように注意しなければならない」という内容について書いている。

質問項目⑩の「オンライン授業は「隣の学生とちょっと話す」ということがしにくかった」でも 4.36 という高い値となっている。確かに、教師と他の学生が話しているときに隣の学生に何かを確認をするなどはオンライン授業ではしにくいであろう。もちろん zoom のチャット機能を使うなどの代替方法はあるが直感的に即座にという観点からすると、やはり難しさが残るのであろう。

上記２つの回答結果を裏付けるように質問項目⑤の「オンラインでのディスカッションで挙手して発言しやすかった」は、3.28、質問項目①の「オンラインでのディスカッションで自分の発話量は増えた」は、3.71 と、それほど高い数値を示していない。

自由記述の「オンライン授業の悪い点を３つ書いてください」という質問項目にも「雰囲気や表情が読み取れないため相互理解できているか判断しづらい」という回答記述が７名に見られた。もちろん、この回答は学生の使用するデバイスの性能にも依存すると考えられるが、パソコンやタブレット型端末の画面越しに相手を平面で見るのと教室で立体的に見るのとではノンバーバルコミュニケーションから得られる情報量に違いがあることを学生は感じているのではないだろうか。

### 5.4　オンライン授業で伸びる力とは

本節では自由記述の「オンライン授業で伸びる能力とはどんなものだと思いますか」という問いに対しての学生の回答結果を整理し、学生がオンライン授業をどのように位置づけているかについて考えてみたい。

まず回答者からの記述の中でもっとも多かったのが「言語能力」である。14 名の内、10 名の学生が当該項目に近い内容について言及しているが、ここでいう言語能力とは、いかに端的に情報をことばで伝えるかということである。前述したように、オンライン授業では、ノンバーバルコミュニケーションの乏しさや一方向性のコミュニケーションになりがちであるため、クラス全員に対して「全部言わなくてもわかるよね」という、いわゆる文脈共有がしにくい。したがって、発言する学生には、どのタイミングで発言するかを考えつつ、短いことばで過不足なく情報を相手に伝える技術が求められる。

次いで自由記述の回答の中で多かったのが「計画性」である。「授業がオンラインで提供されるようになり、自分で計画的に授業履修計画を立て、課題遂行をしていかないと対応できない」という類の記述が自由記述欄に散見された。オンライン授業は、自宅から出なくても授業が受けられる。特に非同期型授業は学生が好きな時間に視聴し課題に取り組める。一見自由度が高いが、その分、自分で自分を律しないといけないと学生は感じていることがわかった。

### 5.5　教師から見たオンライン授業

以上が学生へのアンケート調査の結果と考察であるが本節では教師の視点からオンライン授業の利点と弱点について整理したい。

まずは利点だが移動がないことは学生同様に利点となりうるだろう。また、オンラインを使って学生とのやり取りが主流となるため事前課題や事後課題を出す頻度が上がったことは事実としてある。これが対面授業だけであれば、教室で配布物を渡すなどの対応だけで済ませていたかもしれない。このことは千葉大学教育学部付属小学校（2020）が指摘しているように、コロナウイルスによって既存の授業では見えなかったものが顕在化した一例と言えよう。

弱点としては、学生の反応をノンバーバルコミュニケーション含む多様な情報源から得ることの難しさが挙げられる。もちろん画面から学生の表情をつかむことはできるし、zoom のチャット機能を使って双方向的にやり取りをすることは可能だが、果たして教室と同等、同質の活動をオンラインで再現することが望ましいのかについては疑問が残る。中原（2020）が実際の教室と同じ活動をオンラインでも行おうとする意味への疑問を呈しているように、実際の教室と同等・同質の活動を求めることは避けるべきなのかもしれない。

やり取りの方向性についてもオンライン授業では難しさが残った。前述したが zoom でのやり取りでは、誰かが話しているときは、他の学生はその発言が終わるのを待たねばならないため、コミュニケーションが一対一の指向となりがちであったことは今後のオンライン授業の改善点として挙げられる[iv]。

## 6.　総括

本稿では比較日本文化論の履修者へのアンケート調査の結果をもとに学生がどのように

オンライン授業を受け止めているかを明らかにすることを狙いとした。その結果、物理的な移動がないことと情報の整理のしやすさといった点においてオンライン授業は利点があると学生が感じていることがわかった。他方、複数の参加者が同時に話すなどの活動はしにくいため、コミュニケーションが一方向的になりがちであることに対しては不満を抱えていることも見えてきた。また、表情を含むノンバーバルコミュニケーションから得る情報の少なさや隣の学生とちょっとしたことを話す難しさもオンライン授業の限界として感じていることも窺えた。

上記の欠点を反映するかのように、「オンライン授業は友人ができやすかったか」という質問項目は、全項目中でもっとも低い値となっていた。学生は物理的な教室移動の間に授業とは関係のない話をし、教室内でも相手の表情やちょっとした会話から相互理解を深めているはずである。実際の教室空間で行えていた双方的にみなが同時に話したり、隣の学生と小さな声で話したり、授業とは本質的に関係のない会話であったりの価値に学生が相対的に気付いた結果が今回のアンケート調査結果から見てとれた。

オンライン授業は善か悪かといった議論を目にすることがあるが今回の授業実践を通して、オンライン授業と対面授業に優劣をつけるのではなく、両者が持つ特性を教員が正しく理解することこそが重要であるという結論を得るにいたった。

オンライン授業は、学生への情報の伝達という行為に限って言えば優れている。特に非同期型オンライン授業は学生が自分で時間を決めて何度でも見ることができる利点がある。オンラインでの課題提出も同様である。その反面、双方向的な活動や授業の本質とは直接関係のない会話や活動においてオンライン授業は限界がある。したがって、今後、教育効果を高めるための現実的な授業形態としては、オンライン授業と対面授業の混合型であるハイブリッド型授業である可能性が高い。知識・情報の伝達が多いものはオンラインで提供し、対面では自由度の高いディスカッションをという分け方が望ましいと本稿筆者は考えている。言い換えれば、正否がはっきりとある類の活動はオンラインで提供し、正否を求めるのではなく過程そのものに価値を見出す活動は対面で、という分け方がひとつの目安となるということである。

本稿は学生がオンライン授業をどのように捉えているかについてアンケート調査の結果をもとに論じてきた。そこには一定の傾向が窺えたが対象とした被験者数の少なさは否めない。また、オンライン授業の教育効果という点についても触れていない。これらは今後の課題としたい。

## 参考文献

1. 赤堀侃司（2020）『オンライン学習・授業のデザインと実践』ジャムハウス
2. 千葉大学教育学部付属小学校（2020）『オンライン学習でできること、できないこと』明治図書
3. ケヴィン・ケリー、服部桂訳（2016）『〈インターネット〉の次に来るもの』NHK 出版
4. 草間和博・吉田成章（2020）『ポスト・コロナの学校教育』渓水社
5. 中原淳（2020）「わたしが『オンライン授業』を実践した理由～『ポスト･コロナの学び』を想う」東洋出版社編『ポスト・コロナショックの学校で教師が考えておきたいこと』東洋館出版社，pp.46-53.

6. 苫野一徳（2020）「コロナショックで問われる『学校』『教師』の存在意義～公教育の構造転換に向けて～」東洋出版社編『ポスト・コロナショックの学校で教師が考えておきたいこと』東洋館出版社，pp.4-13.
7. 東洋大学現代社会総合研究所 ICT 教育プロジェクト（2020）「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査」<https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/research/labo-center/gensha/research/52395/1questionnaire.ashx?la=ja-JP&hash=C36CFE9B7AD656C60987AAB3BE92B314052C9E19>（最終閲覧日：2020年10月15日）
8. 山田智久（2019）「日英バイリンガルクラスでの学び～比較日本文化論授業アンケート調査から～」『小樽商科大学言語センター広報 Language Studies』27号，pp.63-72.

---

[i] 本稿でのオンライン授業とは特別な説明がない限り、zoomを使った同期型授業を指す。
[ii] 対面型授業、対面授業、面接授業などの表記があるが本稿では対面授業に統一する。
[iii] 詳しくは、「山田智久（2019）「日英バイリンガルクラスでの学び～比較日本文化論授業アンケート調査から～」『小樽商科大学言語センター広報 Language Studies』27号，pp.63-72.」を参照のこと。
[iv] SpatialChat（https://spatial.chat/）などの有料Webサービスを使うと実際の教室空間をオンラインでバーチャルに作りだすことはできるが今回の授業では使用しなかった。